

通常の戦法では、五人で一組を編成するが、これが一回の戦闘で四人が討死して一人だけ死ななかつたときには、必ずその者を処罰して家を取り潰す。昔から我が国においてはこのような方法は必要が無いとは云うものの、士卒にはよくこの旨を教え、励まさねばならない。戦法を教える方法は、先ず一人に教えて五人にこれを普及し、その五人から十人に普及し、十人から百人、百人から千万人へと及ぼして、その教えが徹底されているのを見て確認するのである。

そのようにすれば、乱世の時節、にわかには大衆をかき集めて十分に戦の実行単位に至らしめることは非常に困難ではあるが、法令が正しく定められており、将の威厳が保たれている時には、応急的な号令も定着して、人々はこれを疑うことが無い。斉の孫武は、官女たちをかき集めて戦のやり方を理解させ、（従わない女官を皆の面前で切り殺して）前進・停止や発声・控えを教令のとおりを実施させた。ましてや、何故、その道に従事する勇猛な男たちにできないことがあるのか。ただし、教えの成果が出ないということは、将たる者の智謀と勇ましさと厳しさのいずれもが不足していることに起因するのである。

又、戦は馬上にあるのが有利なこともあるだろう。徒（かち）立ちが有利なこともあるだろう。それを一概に定めてはならない。あるいは、敵が疲労してやって来て、味方は十分に休養をとっていて余裕があるならば、兵を徒立ちにして馬上をめぐらせて斬りこみ、馬を横にはらって切り倒して敵が驚くところに勝ち目を見出せば、即時に勝利を収めることができるだろう。正成はこれらのことを常に心掛けて、者どもにも言っておいたのではあつたが、ついにこのようにして敵軍と遭遇することは無かつた。毎度似たような戦は多いけれども、その時々で替わるものであるから、あらゆることは前もってこうだとは定め難い。唯一、士卒が訓練されていないのと、心が一つにならないのとは将の非であつて、そのまま敗亡の発端となるのは間違いない。